

「板書の工夫で授業が変わる」

板書 5つのポイント

元新宿区立西戸山小学校教諭 安田 恭子



スイミーで研究授業をした時、「板書計画はどのように考えていましたか。」と聞かれて困ってしまいました。特にベテランの先生から、「板書は計画的にしないと、学習の流れが見えなくなるよ。」と言われました。子どもの発言を書いていくだけではダメなのではないでしょうか。

また、字を書くのが苦手なので、できるだけカードを用意しているのですが、どうしても板書にメリハリがなく、自分でもわかりにくい板書になっているようで悩んでいるのです。



板書ってむずかしいですね。特に研究授業などで考えすぎてしまうと、むりやり授業を引っ張ってしまう形になるでしょ。でも、ちょっとした工夫で随分わかりやすくなるものですよ。二年生の「スイミー」を例にとって、板書をつくってみましょう。



スイミー しオ・しオニ作

海の中で元気をとりもどした日のスイミー

スイミーはおよいだ、くらい海のそこを。こわかった。さびしかった。とてもかなしかった。

けれど、海には、すばらしいものがいっぱいあった。おもしろいものを見るたびに、スイミーは、だんだん元気をとりもどした。

にじ色のゼリーのようなくらげ。

水中ブルドーザーみたいな見ええび。

見たこともない魚たち。見えない糸でひっぱられている。

ドロップみたいな岩から生えている、こんぶやわかめの林。

毎時間書いたり、使ったりするものはカードにしておこう。

その時間のめあてと活動を明確にしておこう。

板書の行がえは、意図的にしよう。

文字の大きさやサイドラインの種類や色分け、□の囲みも工夫しよう。

すべての叙述を板書せず、逆に板書をしていないことで叙述に注目させよう。

スイミー レオ・レオニ作

海の中で元気をとりもどしたスイミーになって、日記を書こうー

スイミーはおよいだ、くらい海のそこを。こわかった。さびしかった。とてもかなしかった。

けれど、海にはすばらしいものがいっぱいあった。おもしろいものを見るたびにスイミーはだんだん元気をとりもどした。

くらげ いせえび

見たこともない魚たち

伝えたいポイントが明確になります。

「倒置法」「たたみかける表現」「同じ仲間の言葉」などを視覚的に印象づけることができます。

授業力は板書に表れる

京都女子大学教授 吉永 幸司よしなが こうし

教室には必ず黒板が正面に据えられている。毎日、黒板と向かい合っている子どもは黒板の少しの変化にも敏感である。小さなメモでも落とさない。黒板がきれいで、有効に活用している学級は生気に溢れている。

当然、授業においても、黒板の活用は、良い授業をするうえで重要な役割を果たす。

(1) 授業力があると良い板書になる。

「今日の授業はとてもよく分かった。」
と、感想を伝える子がいた。その理由は「黒板を見ていると、何が大事かということがよく分かった」であった。その授業は、あらかじめ、黒板に書く事柄や、どの位置に書くかということまで細かに計画をしていた。教材研究を丁寧に行っていたので自信があった。だから、子どもから「よく分かった」と言われたり、先輩から「良い板書です」とほめられたら、授業力が板書に表れてきたと密かに胸を張ったものである。

(2) 板書は考える力を育てる

最初は何も書いていない黒板であるのに、授業の終わりには、語や文、文章でいっぱいになる。しかも、整然と。課題や答え、

要点や要約文など、授業の目的に応じて書いていく。

板書で考える力を育てるには次のことは欠くことができない。

- ・ 学習の目標と、目標にたどり着く道筋を明確にする板書。
- ・ 語や文、文章の羅列ではなく、構造的にまとまりのある板書。
- ・ 教科書の言葉、子どもの発言、知識技能に関わる内容などが整然とした板書。

(3) 心がときめく板書で意欲を育てる

板書をノートに写させる活動をさせることがある。最初は、黒板の通りに写させる。

黒板の通りに写すことに馴れた頃を見計らって、少しずつ、自分の考えを書き加える。更に、自分だったらどんな板書にするかという気持ちでノートを書く、発言を聞くという雰囲気があれば、板書のメッセージが学習意欲に結びつく。

「先生は、何色のチョークを使うのだろう」「どのように書かれるのだろうか」

ノートを黒板に見立てて、心ときめかせながら板書に学ぶような国語教室づくりは学習意欲を高める。

板書 5つのポイント

- ① 学習スタート前には、板書計画を
- ② 「めあて」と「まとめ」を対応させる
- ③ 子どもの発言を生かし、思考を促す
- ④ 文字とカードで上手にメリハリを
- ⑤ ノートにも生きる板書を



1

板書の目的は、その時間に取り上げる叙述を抜き書きしたりすることだけではありません。導入・展開・終末それぞれの段階で何をどのように書くのか、しっかりと計画を立てておきましょう。

2

板書では、めあてだけが書かれるのではなく、めあて達成のまとめも、しっかりと明示したいものです。
まとめは、左の図のような児童に与えるワークシートの拡大版を示すなどの手立ても考えられます。

スマイル日記(パート3)
だんだん元気をうちとしらばい。
きょうはくは

3

教師の発問に対して、児童は必ずしも教師の意図したとおりに答えてくれるとは限りません。
児童の発言を授業のめあてにあわせて板書したり、気づかせたいことを、あえて板書せずに、教科書にサイドラインを引かせるなど、児童の思考を活性化・整理する板書にしましょう。



4

カラーチョークを使ったり、文字の大きさや太さを変えたりすること、言葉に囲みをつけることで板書にメリハリが出ます。
また、特に重要な部分や繰り返し使うもの(タイトル・登場人物など)は、カードを準備するなどして、生き生きとした板書を心がけましょう。

5

いつ、どれをノートに書かせ、前時や次時の学習ともつなげるような板書にするのか、十分に考えておきたいものです。
時には、学習のまとめをノートに書くときに、板書の大切な部分を消すことによって児童に印象づけることもできるのです。